

何もかも失った田老にあって、唯一残されたものは「郷土愛」だったかもしれない。先祖伝来の土地がある。悲劇をもたらした海がある。しかし、その海は恵みの海でもある。この海があるからこそ生計も維持されてきた。

全村民が満州に移住しようとの話すら出た。恒久的な対策としては高地移転しかない。と学者は唱えた。高地移転だと約五百戸の家屋が対象となるし、第一適当な高地もない。漁業経営にも支障もありそう。山を切り崩して平坦地を高台化する方法もあるが、それも難工事となる。議論百出の中、内務省の指示はやはり「復旧のためには高台へ移れ」だった。関口村長は「漁師が高台へ移っては仕事にならない。第一、そんな場所はない。だから防浪堤を造る」と主張した。しかも、「防浪堤だけではだめだ。避難路がないから多くの犠牲者が出たのだ」と、市街地計画も同時に始めることとした。

現在の田老町民が潮騒を子守り歌として聞くことができるのは、防浪堤があるからでもある。「田老村災害復旧工事計画」と「生産施設援助による施設計画」が立てられた。災害復旧工事は、市街地計画、防浪堤築造計画、長内川護岸計画、田老川護岸計画、防浪林養成計画から成る。まさに、百年の大計が開始されたのだ。

■市街地計画

防浪堤を造り、この内側に県道(現国道)と市街地を整備することとした。同時に、避難道路(現在の縦横の町道)の

整備も必須だ。津波犠牲者が多く出た原因の一つが未整備道路であったし逃げようにも柵や垣根に阻まれたことである。が、村有地はない。この工事は耕地整備法によることとした。

八年十月十五日に岩手県復興事務局、下閉伊支庁耕地整備課の指導を受け、耕地整理組合の組織化に着手した。十二月五日認可申請、同十三日認可、同十六日に創立総会を開催し定款を定めた。全地主の賛同を得て設立した。百年の大計のため、各地主が所有地を二割ずつ提供、防浪堤や道路の敷地を確保することとなった。

耕地整理組合の事業としては住宅地の区画化と割り当て、耕地の土砂除却、道路の切り換えなどがある。工事費三万二千円のうち、起債(借金)一万五千元、県補助金一万七千元とした。

■防浪堤築造計画

計画されたのは小林から青砂里の出羽神社まで、一直線に延びる約千尺の長さだった。工事費は二十数万円かかることから内務省は反対、不認可となり中止されることとなった。しかし、最大のこの復興計画を中止することは子孫に対し悔いを残すことにもなりかねない。関口村長の決断は「田老単独の事業でやる」だった。まさに、津波への挑戦だ。

計画を縮小し、小林から長内川橋までとし、第一期工事を延長五百尺、高さ十五尺とすることとした。翌九年三月に着工された。村単独でやることとしたため宅地造成資金として五万円を預金部から

借り入れている。

石黒英彦岩手県知事が復興工事の視察のため十年に田老を訪れている。関口村長は現場を指揮したり、自ら労働を行うこともあった。知事は村内の工事、復旧ぶりを見て回った。これを機に、「関口には負けた」と、防浪堤築造工事は県が行うこととなった。

■長内川護岸計画

長内川は市街地に沿って流れる。市街地計画には大きく関係することから切り換えと護岸整備を行う必要があった。この工事は六千八百円(八五%県補助)で実施された。

■田老川護岸計画

交通上、重要でもあった田老川は防浪堤外側に沿って北流させ、長内川と合流させてから田老湾に注がせることとなった。また、河口から四ツ島付近にかけて繫舟護岸(岸壁)を造って荷役の便を図ることとした。工事費は四万五千元(八五%県補助)。

■防浪林養成計画

田老須賀、砂地などを活用し、約七町歩(七畝)に黒松、赤松を植栽することとした。市街地計画のため各地主が二割ずつ土地を提供し、余った分も活用されている。植栽には当時の子どもたちもアメ玉の礼で労力奉仕している。

復興工事だけでなく、「生産施設援助による施設計画」もただちに実施されている。生活の糧を得るためには、むしろこちらが急務でもある。各種産業に援助されているが、その内訳は次のとおりだった。いずれも早い対応だったことがわかる。

生産施設援助による施設計画

■生産施設援助

総額 25,000 円を義援金から得たのとおり交付、復旧を促した。水産共同施設(漁業組合)7,800 円 養蚕共同施設(養蚕組合)1,580 円 畜産共同施設(産牛改良組合)5,960 円 林業共同施設(産業組合)2,800 円 副業共同組合(産業組合)4,200 円 商工施設(産業組合)2,660 円。そして各組合は復旧を次のとおり計画した。

- ▶漁業組合—県殖産銀行5万円、商工業復旧資金2万5,000円を借入、漁具、サップ船700隻を購入、全組合員に分与した。
- ▶農 会—耕地被害復旧地(半額国庫補助)、農具(現品)8,300円、納屋建設費5,200円、種子(馬鈴薯640俵、大豆25石6斗、甘藷苗2万6,240本、蔬菜種2石5斗、雑穀種12石4斗)を支給、耕地の復旧と肥料共同購入、耕作指導を行った。
- ▶産業組合—木炭倉庫建造、桐苗圃設定2,800円、副業施設2,600円(しょう油醸造場の建造、プラン製造)。
- ▶産牛改良組合—牛種改良・種牡牛1頭1,300円、種牝牛9頭3,160円、飼料共同調整備600円。
- ▶養蚕組合—費用4,960円(県補助1,760円)で蚕具、蚕種を分与し桑園復旧費として苗木代を支給、稚蚕共同飼育所を1,650円(県補助1,300円)で建設することとなる。
- ▶養豚組合—66円で種豚購入、共同飼育所を建設することとなる。
- ▶養鶏組合—330円で共同飼育所を建設、初生ヒナを共同飼育し組合員に配布することとなる。

■商工業関係

県転貸の低利資金を借入、無利子で復興資金として転貸した。商工業復旧資金用4,500円、運送船建造資金用3,500円、郵便局舎復旧資金用1,500円。

- ▶運送船建造資金の運用—唯一の交通機関である運送船が流出したため、下閉伊支庁の援助で漁船を借用し交通運輸に当たさせたが支障があった。資金貸与で8年5月5日、6月15日、9年1月5日に各1隻を建造、宮古との間に就航できた。
- ▶郵便局舎復旧資金の運用—津波のため機能は破壊、一時はまったく通信機能が途絶えた。津波翌日の3月4日には民家の一部を仮局舎として事務を救ったが不便なため独立家屋を建設、6月4日に移転し仮局舎とした。復旧資金により本局舎の建設を計画する。

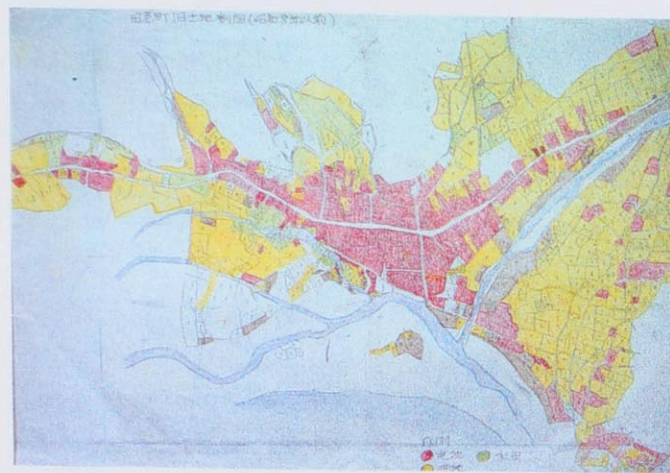
各団体・会社、その他

■消防組

津波による部員欠員の補充を図り、組付小頭、部長を各以下のとおりするとともに、機械器具も復興委員会に諮り決定した。組付小頭・鳥居福右エ門、一部長・鳥居初之助、五部長・中島善次郎、六部長・和井田嘉助。

■電灯会社

- 災害後、ただちに2万円を復旧に努力、4月半ばに点灯した。その後は市街地や工事の進行につれ本工事を行う。
- ▶備蓄倉庫の建設—将来の災害に備え、2,700円で建設、食料、衣類、日用品を常備することとなる。
- ▶診療所建設—緊急の医療薬品の常備と平時の診療所に充てるため診療所を建設することとし、すでに薬品の交付を得る。
- ▶教員住宅の建設—教員の住宅難解消のため、預金部から1,600円を借入、2戸1棟を建設することとする。
- ▶隔離病舎の建設—計画中だが財政難で考慮中。幸い伝染病の発生はなかった。



津波前の田老の地形図



防浪堤工事着工前の田老=昭和9年2月

花いちもんめ

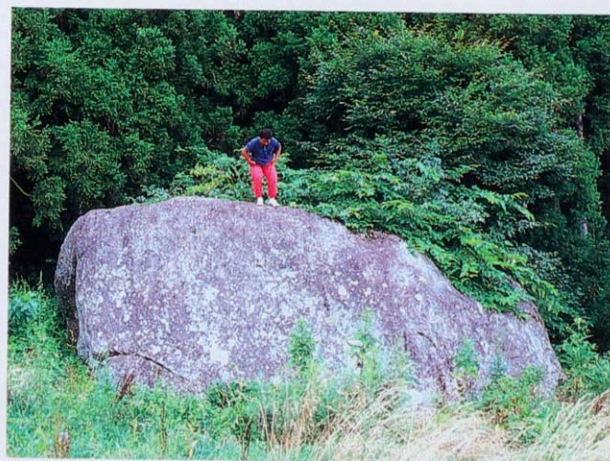
昭和九年三月から防浪堤の建設は早くも始まり、各地から多くの労働者も来た。その年、当時は珍しいスカート姿の女の子が田老小学校に転校して来た。四年生だったろうか。その女の子は、まだ田老の子どもたちが知らない歌を知っていた。

勝つてうれしい 花いちもんめ
負けて悔やしい 花いちもんめ
古里まどめて 花いちもんめ
だれさん取りたい 花いちもんめ

「花いちもんめ」は歌だけでなく、踊り(遊び)が伴う。当時、女の子の間ではやったようだ。乙部の木村チヨさん(七一)は、昨年この当時の思い出を歌にしている。

遠き日にスカートの少女 輪の中に
花いちもんめと 校舎にぎわう

田老小学校が昭和十四年に発行した「郷土研究」第6号には五十五編の民謡、童謡が掲載されているが、そこに「花いちもんめ」もある。



津波で押し流されて来たという撰待の大岩

◎水沢には「津波が来たから小暗ヶ沢に逃げろ」との伝承があった。高台の湯場に逃げた人が犠牲になり、低地のこの沢に走った人が助かった。地形により変化する津波への戒めなのか。

◎和野の越田(こした)地区は津波が越えて来たため付いた地名とか。海抜百尺も地帯だが、ここでは明治二十九年の津波では民家のすぐ下まで波が来た音がしたという。

◎撰待には津波で押し上げられたと伝わる大岩がある。海岸から五百尺入った所だが、撰待川近くの平地だ。こんな大岩が、とも思うが過去にはどんな津波が襲っているものやら。

◇沖繩には海抜八十尺ほどの山中に津波のこん跡があるという。なだらかな山だった可能性もある。三陸地方では慶長十六年(一六一一年)の津波が大津波として伝承されているようでもある。「稲わらの火」は和歌山県であった安政元年(一八五四年)の実話。

着々進む整備

関口像建立

津波から村は徐々にだが、確実に復興していった。土木工事のため各地から来た人々を相手に商売する村人もいた。小塩銀太郎などが防浪堤工事を請け負った。その防浪堤、県道、市街地区画、護岸、岸壁などが姿を現し出してきた。田老川は八幡神社の内側を流れていたのを外側に回した。藩政時代から何度となく暴れた川だったが、洪水の心配もいづらかは解消できた。

村民だれもが関口村長に感謝の念を抱いていた。社会教育委員会を中心に胸像を建てようとの声が起こり、六百六十六人から千九百二十五銭の寄付が集まった。そして像は、昭和十年十二月に完成した。翌年一月には「胸像完成記念 関口松太郎小伝」が発行されたが、この冊子に関口村長の半生や寄付者名簿

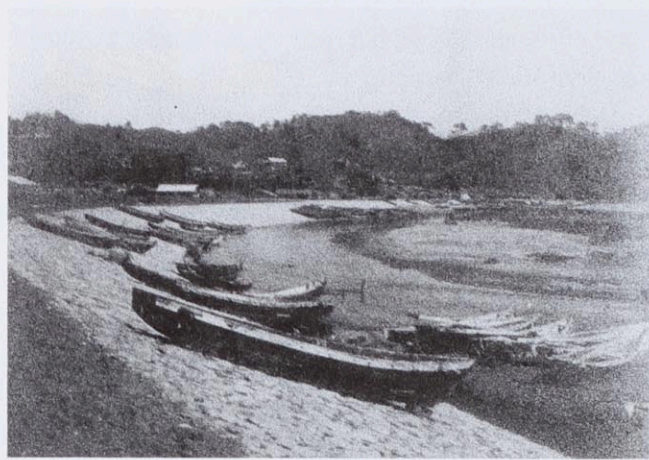
などが掲載されている。胸像、冊子とも佐々木弘平（田老村社会教育委員長、田老小学校校長）が代表となっている。現在もきんと海に向かって役場前に建つ関口像は寄付者六百六十六人、男女の青年団の労力奉仕、五十人の発起人のほか次の五人が像に直接関与している。

原型製作者 吉川 保七
 鑄造者 高橋 萬治
 台座製作者 小池 定由
 文字揮ごう者 岩手県知事 石黒 英彦

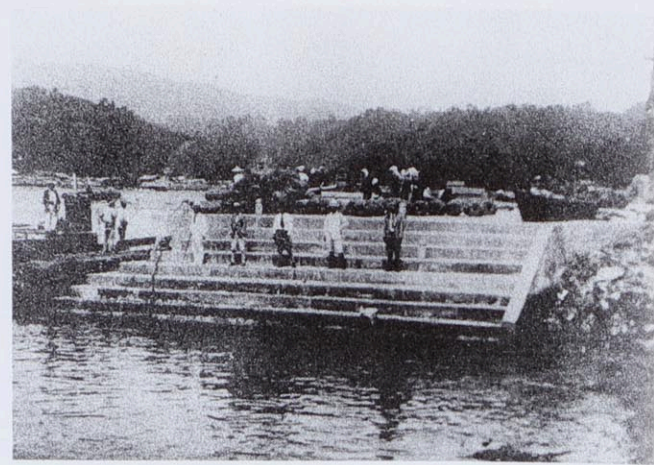
津波からの復興工事は着々進んだが、進んだのはこればかりでない。鉱山開発もあったし、漁業組合のこともあった。昭和四年九月には田老、乙部の漁業組合の合併協議がなされたりしたが、合意に



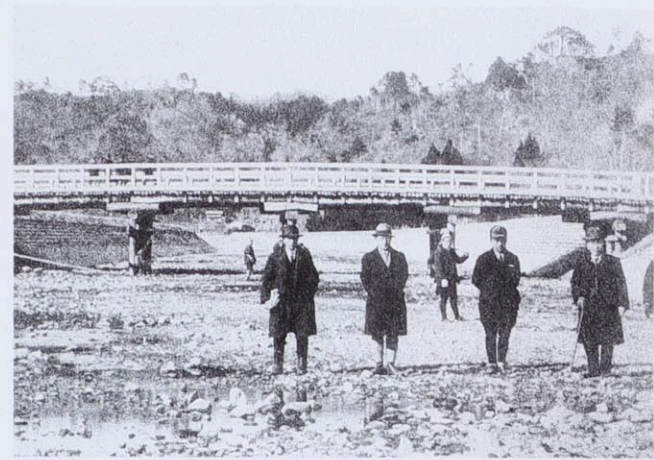
改修された長内川護岸



田老川の護岸も整備



田老漁港の改修



完成した荒谷橋、右から2人目は関口村長

朝日新聞社から

田の沢の大海嘯訓令

碑の裏面を読むことは大切だ。建立者や年号から時の状況も推察できる。表面より重要な場合も多い。放浪の俳人・種田山頭火は「墓の裏にまわる」と意味を込めた。田の沢の大海嘯訓令碑の裏には次のように刻まれている。

昭和八年三月三日午前二時三十分上下ニ
 動揺スル強震アリ続イテ三時十分頃ヨリ
 大音響ト共ニ大海嘯ノ襲来アリ午前三時
 二十分頃被害最モ多シ本村ノ流出戸数五
 百五戸溺死者九百一十一名負傷者百二十二
 名
 損害見舞額金二百九十二万八千七百五十
 五円本碑ハ東京朝日新聞社読者ヨリ寄託
 セラレタル義損金ヲ同社ニ於テ罹災各町
 村ニ分配セル残余ヲ更ニ本碑建設費トシ
 テ寄贈セラレシタル金員を以テ建設シタ
 ルモノ也
 昭和九年三月
 下閉伊郡田老村長 関口松太郎



田の沢にある大海嘯訓令の碑

交通網の発達

宮古まで定期便

一揆衆が通り、官軍が通った街道はあったものの、宮古や小本へ行くその通りは人馬が通れる程度の山道だった。宮古までの交通は明治初期から主に和船に頼っていた。

県道小本宮古線は津波前から工事が進められていたが、宮古田老間一九・六が昭和十一年に開通した。初めて自動車が行ったのだった（田老鉱山では開鉱準備でこれ以前に自動車を使用）。この道路は旧国道で、現在も使用することができている。九年十一月には山田線が宮古まで開通しており、新交通時代の幕開けの時期ともいえる。開通したばかりの県道を通り、十一年十一月には民情視察のため秩父宮殿下ご夫妻が来村、村をあげて歓迎した。村の有力者たちは正装、軍服姿で

整列し迎えた。小学生たちも迎えた。最敬礼し、「頭、右」の号令で緊張の面持ちで車を注目した。ご夫妻は田老小学校を休憩所として使った。

県道の開通で十一年十一月、田老海陸運輸合資会社が設立されている。十五人が出資し、資本金は二万円。龍鼻喜代松と前川友七が代表者となった。十三年に定期自動車運行が認可になっている。十四年一月現在で次の規模の会社だった。

船舶部 発動機船五隻 従業員十五人
 自動車部 貨物二台、客車五台 従業員十人
 事務所 三輪車一台 従業員五人
 田老を六時半、十一時、十四時半に出る宮古までは一時間、一人六十銭。個人経営の佐幸自動車部もあった。

海路交通の歴史

宮古までの交通といえば昭和40年あたりまで船が多かったが、その歴史は明治初期から始まる。前川（屋号・長屋）が和船で宮古までの交通運輸に当たったが、明治29年の津波までだった。その後、前川虎吉、加藤伊勢次郎へと続いたが、大正2年に加藤は龍鼻喜代松、加藤福松、穂高與之助、田川福松、小幡松之助らと共同経営で発動機船共愛丸を建造し、運航を始めた。

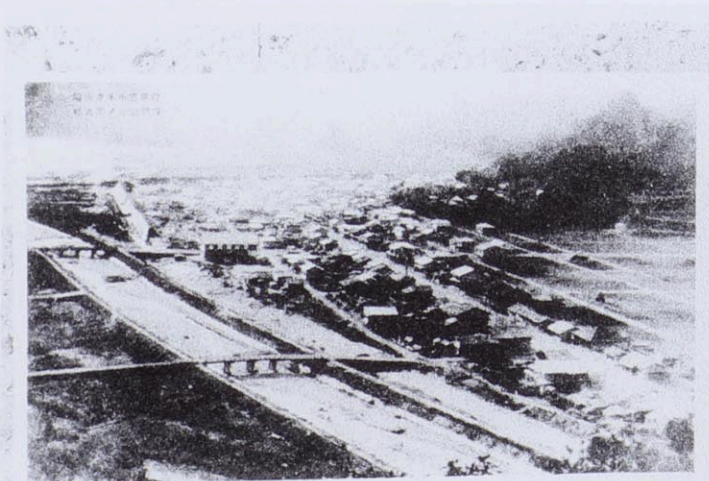
大正7年には前川友七、大坂留太、土井栄一、前川幸一郎、赤沼万蔵らが共栄を経営した。両船は対立し、船賃は30銭が5銭まで下がるほどの競争をしたが、9年に合併、船賃は20銭に落ち着いた。14年には田老丸も加え隆盛あるのみだったが、昭和8年の津波で3隻とも全滅している。

津波後、前川らは15人で組合をつくり、八戸の共栄丸、宮古の漁吉丸を借り、中古船の明石丸を購入、復活させた。また、8年のうちに第2田老丸、共運丸を建造し借船は返還、11年には倍のトン数、38トン75馬力のディーゼル機関客船、第5田老丸を建造している。

間もなく海陸の合資会社になった。船は50分、30銭で宮古と結び、1日3往復だった。6、16、26日の田老市日には特別便も出るなど、船便は昭和40年ほどまでにぎわった。



工事が進む防浪堤



復興していった田老11年

関口松太郎

偉大なる村長

数々の業績を残し、関口松太郎が逝去したのは昭和十二年十一月二十九日だった。「翁」と呼ばれ、村人の手で生前に胸像が立つほどの人物だった。村長、県会議員在職中の七十五歳の冬の日のことだった。

倒れたのは役場・村長室で執務中とき。うなるような声に気づいた職員が見ると、机を前にしていきぐったりし、両手を垂らしていた。宿にしていたお寺にすぐ運ばれた。その後宮古・横町の自宅へ船で帰った。病症は良くなったが悪くなったりしたが、入院中は「胸像を建ててもらったお礼をしなくては」とよく言っていた。数々の武勇伝も残した関口松太郎翁だった。



関口松太郎村長

大正十三年の田老小学校の火災で村政はゴタゴタ、旧村意識も強かった。災害という異常事態の中で村長よりも、逆に有力議員の力も強かった。その議員に「関口はいい男だ」と言われしめされた。大正十五年には田老大火があった。翁は「私は災害を追って歩く人間なのか」とぼやいた。「天のあなたに対する試練と思えばいい」と言われた。その試練も大津波という最悪の事態を経験したのだったが、田老を見事に再興させた。宮古町長五期目すぐに宮古町は緞ヶ崎と合併、再度町長選があり負けた。相手は金も力もあったが、議論では翁にかなわぬ。相手は和解を求めて酒席を設けた。完全に酔った翁は帰路、相手の手下に待ち伏せされてやられた。「敵は相手の

はない、酒だ」と、それ以来酒を慎んだ。酒席を設ければ県会議長二期目当選もできたものを、翁はしなかった。役場での飲酒にも厳しかった。村長出張の日、時の助役は酒を飲んでいた。猛吹雪でもあり、よもや帰っては来ないだろうと思っていたところに来た。助役は一遍に酒がさめた。翁は外出の際にはいつもステッキを愛用していた。道路の石をステッキではねながら歩き、人の家のガラスを割った。家人は「いくら村長だろうとひどい」と抗議したが、翁いわく「自分の家の前くらい片付けておけ」と言ったとか。人間くさい。

その翁、田老小学校建設のため自分の給料を自ら下げた。自分にも他人にも厳しく、工事現場監督にも厳しい注文をつけ、「村長にかかってはごまかしがきかない」と言われた。宮古町長時代、護岸工事は干潮時しかできず、真夜中の干潮時に一睡もしないで現場に向かい監督したこともあった。

郡役所時代の十一年、宮古大火があった。自宅が燃えさかるのを目の前にしながら、翁は役所の防火活動に専念した。やはり人物だ。何より、防浪堤工事を村費単独で始めた人物でもある。その熱意に石黒英彦知事が「関口には負けた」と、県工事に移管したのだから相当だ。翁は田老村の津波復旧のため生涯をささげるつもりだったという。復旧予算確保のため、県や政府を相手に東奔西走、不眠不休だった。県会議員を兼務していたという立場も大きかったが、県会に当選したのもその人徳ゆえんであった。

翁はたばこ好きでもあった。「朝日」を一日に四箱ほどふかした。最初は荒谷栄次郎宅に下宿していたが、後にお寺に移った。単身赴任だったが、郡役所当時、「役所には二人の郡長がいる」とも言われた。一人は内務省の役人で、もう一人が翁だった。翁のその性格は、謹厳、清廉潔白、勝気な負けず嫌いだ。宮古市・常安寺境内に眠る。「積功院松巖翁居士」子がなく、兄の子を養子としたが、こども子ともはない。おいの中島(関口)忠三氏(宮古市)が健在だ。昭和六十二年九月六日、「関口松太郎翁の遺徳をしのぶ会」が胸像前とすぐ近くの常運寺、三王閣で遺族や町関係者など百二十人が出席して行われた。没後五十周年の年だ。役場会議室には翁の直筆「和恵協同」の書と写真が飾ってある。下町の吉水義男さん(七一)が寄贈した。

逸話証言・中島忠三、鈴木喜藤治前町長、山本徳太郎元県議会議員、故松本八之丞元町議会議長、吉水源三郎元町助役

主な出来事

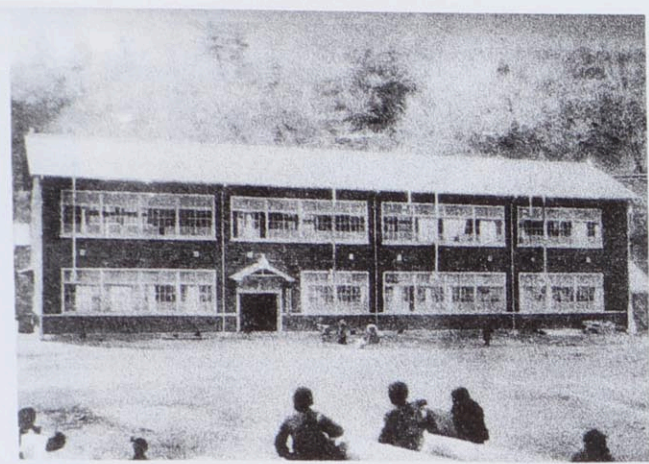
- 一九三三(昭和8) 田老、乙部、撰待の三漁業組合が合併、組合員四百六十七人(10月19日)。耕地整理組合を組織し(12月16日)、市街地計画を立てたほか、防浪堤築造、護岸整備、防潮林養成、生産施設などの災害復興計画を樹立。
- 一九三四(昭和9) 防浪堤築造に着手(3月)。ラサ工業株式会社が本格的な

鉱山開発

膨れる従業員数

田老鉱山(ラサ工業田老鉱業所)は昭和十一年十一月一日に開業した。安政元年(一八五四)に高島嘉右衛門が試掘したのが始まりともされている(若手年鑑)。高島坑と呼ばれた坑道もある。

明治四十四年、ラサ島燐鉱合資会社が恒藤規隆(農学博士)地質土壌学)によって東京に設立された。ラサ島は沖大東島とも呼ばれ、沖繩本島の東端に位置する。大正二年にラサ島燐鉱株式会社がなった。八年に田老鉱区を買収し探鉱を開始しているが、翌九年には業務拡大計画を打ち出すなど順調にスタートした。しかし、十二年九月一日の関東大地震で東京工場が被災するなどし、探鉱は中止となった。再開(昭和四年)、再開(八年)と繰り返しながら、昭和九年から本格的な準備に入った。社名も現在のラサ



36年の大火前まであった田老二小中校舎



操業初期の鉱山(大切坑)

工業株式会社となった。津波の復興と合わせるような形で準備が進められたが、「よそ者が来た」ということで地元民との間に多少のトラブルもあったようだ。浮選鉱工場、乾工場、鉄条索道、道路、変電設備、住宅(長屋)などが整備された。後には診療所なども建ち、一つの町が形成された。開業準備段階から人が多く集まり、その子弟の教育のため十一年四月十三日には長屋を使って小学校の授業も始まった。開山祭には相撲や神楽、花火も登場している。大切坑を主坑道として銅や硫化鉄鉱などを掘り出したが、景気の良さから各地から労働者が集まった。一般労働者の賃金が一日一円の当時、月額六十円から百円にもなった。ジョン、モリスエレングらアメリカ人技師四人も作業指導に当た

っている。十三年には従業員が千八百人にまで膨れ上がった。十六年には日本は戦争に突入、「ラサ」は敵性語であるとして、この時期「鋼生産業株式会社」「東亜鉱工業株式会社」と社名変更し、二十四年にラサに戻している。戦時中は増産体制で従業員も増加した。しかし、軍需省や航空本部から設備の転用命令があり、二十年には操業を休止している。従業員の徴用もあった。また、探鉱課員二百三十人は長野県松本市の本営地下要塞建設へ、福島や静岡でも挺身隊として従事したり機材の転用をしている。終戦の年八月十日には米軍の機銃攻撃を受け、住宅地に被害も出た。

戦後二十年九月から再開準備に入り操業が始まった。その間、事故、合理化、新鉱発見、台風災害などを経験しながら田老鉱山は歩んだ。中でも三十六年にはフェーン大火で全焼しながら、その年十二月には復興式にこぎつけた。国内でも有数の銅鉱山と位置づけられていた。田老町にとっては人口増(昭和十九年町制施行)という面だけでなく、町財政も潤す存在だった。二十九年度でみると、町税収入七百九十七万円のうち鉱山税が一七・二%、百三十七万円を占めた。

フェーン大火後に復興した鉱山の概要は次のようになる(昭和三十九年)。鉱区面積二千六百七十八・六八畝、鉱種は金、銀、銅、鉛、亜鉛、硫化鉄鉱、従業員七百十人。さまざまな福利厚生施設、小中高校、郵便局、派出所もある、二千人の鉱山街をつくっていた。町中心部から四き離れた山あいは、一つの町を形成していた。その活気は四十六年までのことだ

- 含銅硫化鉄鉱の採掘、開業準備。
- 一九三五(昭和10) 青年学校令が交付になり田老青年学校ができる(4月)。
- 一九三六(昭和11) 長屋を教室とした田老尋常高等小学校田老鉱山分教場(後の田老二小)設立(4月13日)。県道小本宮古線のうち田老宮古間が開通。秩父宮ご夫妻が民情視察のため来村(10月)。ラサ工業の田老鉱山が操業開始(11月1日)。田老合同海陸運輸合資会社設立(11月)。
- 一九三七(昭和12) 田老鉱山分教場が私立田老鉱山尋常小学校に(2月16日)。
- 一九三八(昭和13) 村長に高橋寿太郎(1月13日)。鉱山の硫化鉄月産一万二千ト、銅二千五百ト、従業員千八百人。漁民と鉱山とに公害問題。
- 一九三九(昭和14) 田老鉱山と佐賀部定置が年三千五百円で漁業補修協定。
- 一九四〇(昭和15) 日中戦争の影響で防浪堤工事中断、総工費二十二万八千五百円(うち村費五万円)、九百六十畝がほぼ完成(12月)。
- 一九四一(昭和16) 宮古町が市制、人口三万二千八百人(2月11日)。田老森林組合設立(7月)。日本が対米英宣戦布告(12月8日)。
- 一九四二(昭和17) 戦争時局を反映し田老鉱山の従業員増大。村長に木村平右エ門(5月17日)。
- 一九四三(昭和18) アツシ島の日本軍が玉砕、県人三百二十七人、田老出身兵五人(5月30日)。
- 一九四四(昭和19) 町制を施行、人口一万二千二十七人、初代村長木村平右エ門(3月10日)。3月10日から12日